人間・存在・無
――『存在と時間』と『形而上学とは何か』における無性の位置づけについての試論――

加藤 皓士

序論

> 不安の無の明るい夜のうちで、初めて存在者がある一つのそのようなものとして、根源的に開示性されることが、すなわち存在者が存在するのであり、そして無ではない、ということが立ち上る。しかしこの語りの中で、我々が付け加えた「そして無ではない」ということは、後付の説明ではなく、むしろ存在者一般の開示性を、前もって可能とするものである。根源的な無化することの無の本質は、この無が現–存在を初めて、ある一つのそのようなものとしての存在者の前にもたらすこと、その内にある。（GA9.S.114）

1929 年講演『形而上学とは何か』の有名な箇所である。1927 年刊行『存在と時間』を含め、この時期のハイデガーは「無（Nichts）」について集中的に考察している。ここで言われる無は、なにもないという意味の「絶対的な無」のことではなく、存在者ではないもの、すなわち存在と「同一（Selbe）」のものである(GA9 123)。しかしここで言われる同一とは、等しい（einerlei）という意味ではない。引用から理解できるように、無はあくまで現–存在を存在者としての存在者、すなわち存在者の存在の前にもたらすものであり、存在者の存在と全く等しいものではないのである。無と存在はあくまで区別されながらも、しかしある意味では同一のものである。この無と存在の関係性こそが問題である。

> 存在と無は、共に属している。ヘーゲル的な思惟の概念から見て、存在と無が、その無規定性と直接性において、重なり合うからではなく、むしろ存在それ自体が、その本質において有限であり、無へと投げ込まれて保たれている現存在の超越のうちでのみ、開示されるからである。（GA9.S.120）

ここでは、現存在の超越（世界内存在）が無と存在の「共属性(zusammengehören)」を支えるものとして考えられている。我々は以下の考察において、現存在（人間）と存在と無の関係性について考察したい。『存在と時間』では、無は主に「死（Tod）」と関連させて論じられている。なぜ人間の死が、存在者の存在を開示する無と関わるのだろうか。この問いに答えることは、人間存在を軸に新たな存在論を構想するハイデガーの根本的な視座に、決定的な光を与えることとなるはずである。

本論文では、以下の課題に取り組むこととする。１）『存在と時間』における無とは何かを、死を中心にして考察する。２）『形而上学とは何か』における、無と存在と現存在の関係性について検討し、いかなる意味で現存在が存在一般の開示性の条件であるのか、この現存在と存在の関係性において、無がどのような働きを示すのかについて考察する。

第１節　『存在と時間』における無性の意味について

『存在と時間』における無性は、多義的に語られている。しかしこの多義性には、ある統一性がある。そこで決定的に重要なのが死である。死を結節点として、無は多義的に語られる。まずハイデガーの考える死について検討してみることにしよう。『存在と時間』における死の分析は、とても充実したものであり、死は多様に特徴づけられている。しかし我々は、それらすべてを検討することはできない。我々の関心は存在者の存在である、無を理解することであり、この関心の範囲内で死の可能性について検討するにとどめたい。

『存在と時間』で死は、現存在が各自の生の全体を存在する全体存在 （Ganzsein）を考察するという動機のもと扱われるが、この可能性は「もっともおのれに固有（eigenst）」な可能性であり、そのため死への先駆の分析は、本来的な現存在の有り方を考察するという位置づけを持つ。死の可能性は、「すべての実存の可能性が不可能になる可能性（die Möglichkeit der Unmöglichkeit der Existenz überhaupt）」である。この不可能性の可能性は生の全体を規定するものであり、「追い越すことのできな

い(unüberholbar)」この可能性へと先駆することで現存在は、生の全体を引き受けなおし、おのれに固有な本来的実存を可能とするのである。

我々が注目したいのは死の可能性の了解が、世界内存在そのものを問題とするような可能性であるという点である。

> 死は、各々現存在が、自身で引き受けなければならない、ある存在可能性である。この死とともに、彼の最も固有な存在できることにおいて、現存在自身の前に自身が押し迫る。この可能性において、現存在にとって彼の世界内存在することが、端的に問題となる。（SuZ.S.250）

なぜ死の可能性にこのような性格があるのか。この可能性が世界の中の一出来事ではなく、世界内存在そのものを不可能とする可能性だからである。この可能性は、世界の中に生じうるいかなる可能性とも異なり、むしろそれらの可能性を含みこむような巨大な可能性である。全ての振る舞いが不可能となる可能性は、逆説的にではあるが、すべての振る舞いの可能性を開示する可能性でもある。これはすべての可能性を思い起こすことを意味するのではなく、すべての振る舞いの可能性がなくなるという可能性へと跳躍することで、それらの可能性が失われうる全体としてあるということを開示することを意味する。死は、可能性の全体である世界を開示する可能性でもある。

死が特異な可能性であるのは、死が「内世界的な存在者（innerweltliches Seiende）」に関わる可能性ではなく、世界そのものに関わるという点である。死はあくまで各自の現存在の死であり、決して世界それ自体が「消滅」するよう出来事ではない。しかし、死に臨む各自の現存在にとって、死の可能性はそこへと投げ込まれており、そこで生きてきた世界が失われる可能性でもある。この意味で、死は世界が世界として現存在に開示されるような、特異な可能性である。死の可能性が押し迫る中で、現存在は他ならぬこの私が、世界の中で存在してしまっており、世界から消え去ることを了解せざるをえな得ない。死を了解する中で、現存在は自己の全体存在（死に至るまでの生の全体）と固有の存在（死の前にさらされている、他ならぬこの私）を了解するのである。

ハイデガーは死の可能性は、不安という気分において開示されると考えている（SuZ.266）。ここで言われる気分とは、我々が通常理解しているような、単なる心の性状の一変化などではない。気分とは、我々がそこへと投げ込まれ、そこに根ざしてしまっているところ、世界を開示するものとして考えられている。不安という気分は、他の気分とは異なり、世界をまさしく世界として開示するものとして考えられている。そのさい世界は、「無であり、どこにもない」こととして、押し迫ることとなる。

> 無であり、どこにもない、ということが、不安において直面しているものにおいて、開かれる。内世界的な意味で無であり、どこにもないということが、煩わしいということは、現象的に以下のことを意味している。不安において直面しているのは、世界それ自体であるということである。（SuZ.S.186-187）

不安の只中で、我々はなにか特定の対象が煩わしいわけではない。言い表せぬなにかがそうなのである。「それは無であり、どこにもない」。死の可能性は、現存在の存在が不可能になる可能性である。不安が直面するのは、この意味の無でもある。「不安のうちで、現存在は実存が不可能となる可能性という意味の無の前で、おのれを見出す」（SuZ.S.266）。不安において内世界的な存在者は無関心になる。なぜなら死が存在者の全体である世界から、現存在を追い払うからである。そこでは全体における存在者それ自身が、現存在に対してそこから去っていくところとして、押し迫ることとなる。これは、それまでそこで生きてきた世界および、世界を世界たらしめるところの有意義性そのものが、我々に対してそれ自体として開示される事態でも有る。死は世界をそして世界の世界性を「無意義(Unbedeutsamkeit)」なるものとして開示する。

> 無であり、どこにもないということにおいて告げられる、全くの無意義性は世界が消失することを意味するのではなく、内世界的な存在者それ自身が、まったく重要さを失うことであり、内世界的なものが無意義になることが根

拠となり、世界がその世界性において唯一、なお押し迫ることを意味するのである。（SuZ.S.187）

世界及び有意義性それ自体は、我々の日常において忘却されている。我々はこの忘却に基づいてはじめて、有意義性を見越して存在者に対して振る舞うことができるのであった。しかし世界と有意義性は、それ自体としては決して自明なものではなく、そのため現存在に対してなにか「意義（Bedeutung）」を持つものではない。あくまで有意義性の中でのみ、何かが意義を持つのであり、有意義性それ自体、世界それ自体は意義を持つものではない。むしろ、わけも分からず我々がその中へと投げ込まれているものであり、そのため我々に何も語りかけるものではないため、むしろ「不気味（unheimlich）」なものである。死の可能性は、世界と有意義性をそれ自体として開示する特異な可能性であり、世界をその本来的な有り様、無意義性を帯びたものとして開示するのである。不安が開示するものが「無」であるといわれるのも、不安が存在者ではなく、存在者の存在の次元（超越論的な次元）を、無意義性を帯びたものとして開示するからである。ここでは、存在論的差異が考えられている。

なぜ不安が開示するものが無と呼ばれるのかは、ある程度確認できたであろう。我々は、「良心の呼び声（Ruf des Gewissens）」について検討してみることにしたい。良心の呼び声ということで我々が通常理解するのは、何かしらの意味で自己に負い目があるということであろう。しかしハイデガーの考える負い目は、だれか特定の人に対する罪や、何か過誤に対する責任といったものではない。現存在そのものが負い目ある存在なのであり、負い目は存在構造に属するものとして考えられている。

ハイデガーは負い目を分析する中で、無性についても考察する。通常の意味での負い目には、何かしらの規範から逸脱することや、他者の存在を損なうことなどに対する責任など、何かしらの事柄の欠目に対して責任があることが考えられるであろう。ハイデガーはこれらの意味を踏まえつつ、それを形式化して現存在のあり方が「無性の根拠存在（Grundsein einer Nichtigkeit）」であるとする。しかし注意すべきは、現存在に何かしらの欠目があるわけではない。欠目は、すでにある完成体があって、それが損なわれている事態を指すため、完成体を前提とする。しかし現存在

は、あくまでそれ自体が積極的な内容を持つものではなく、可能性として存在するに過ぎない。現存在が可能性として存在する事態は、負い目について検討することを通じて理解できる。

気遣いの三契機（頽落(verfallen)・企投(entwerfen)・被投性(Geworfenheit)）のそれぞれに、無性が浸透しているとハイデガーは考えている。まず頽落に属する無性について検討しよう。頽落とは、我々が自己自身を見失っており、存在者（「世界」）から自己を理解している在りようを指す。頽落は本来的なありかたを見失っているため、非本来的なありかたである。頽落に属する無性は、非本来性の非のことである。良心の呼び声が告げる負い目は、まず非本来性の無性である。しかしこの意味の無性は（瞬間的なものであるにせよ）解消されうる無性であり、より本質的な意味の無性がある。

ハイデガーは企投にも無性があると考えている。企投とは、可能性へとむけて存在者を投げる、現存在の根本的なありかたの一つである。企投に属する無性をハイデガーは以下のように語る。

> この共通の（被投性と企投）無性は、現存在が彼の実存的な諸可能性へと開かれているという自由に属している。しかし自由は、ただ一方を選びとることの内に、すなわち他方を選ばなかったこと、そして他方を選ぶことができないこと、に耐えることの内にある。（SuZ.S.285）

何かを選択することは、ある特定の可能性を選び取ることであり、その可能性に身を置くことである。これは他の可能性を選ばなかったこと、そして選ぶことができないということを、担うことを含意する。我々有限な存在者は、神と異なり全能ではない。そのため誤る可能性や、そもそも選択することができないということ、また同時にすべての可能性を選ぶことができないという事実を堪えなければならない。『カッセル講演』でこの意味の有限性は、ゲーテの「行為するものは良心的ではない」を引用しつつ、以下のように説明されている。

> どんな行為にも同時に負い目があるのです。良心が突きつけるさまざまな要求にくらべると、行動の諸可能性は限られたものなのですから、どんなもの

であれ行動をつらぬけばいろいろな葛藤が生じるのはそのためです。したがって、自己責任を選択することは、絶対的な意味で負い目があるものになることです。私は、そもそも存在する限り、またそもそも行動するとすれば、負い目があるものになるのです。（『カッセル講演』、100 頁）

行為することが、「負い目があるものになる（werden schuldig）」ことを意味するのも、我々は特定の可能性を選択し、行動に移すことができないため、すべての可能性を同時に行為に移すことができないことによる。アンティゴネーの例にならわずとも、どちらの立場も正しいが、あえてどちらかの可能性を選択せざるを得ない事態は存在する。また行為を貫けば、正義と正義がぶつかることも避けられない。この意味で行為するものは、必ず負い目あるものとなる。負い目がないのは、観察するものだけなのである。これは究極的には、現存在が有限な存在者であるため、特定のパースペクティブのもと、特定の可能性しか選択できないことによる。ある特定の可能性を選択し、それを押し進めることは、他の可能性を選択した人間を否定することにつながり、そのため他者に対しても負い目を背負うこととなる。無性を理解するうえで最も重要なのは、被投性に属する「意のままにならない」という意味の無性である。

根拠を存在することは以下のことを意味する。実存することへと投げ出されたものとして、自身の諸可能性に対して常に後れを取っている。現存在は決して自らの根拠の前で実存するのではなく、そのつどただこの根拠から、この根拠として実存するのである。従って根拠存在とは、もっとも固有な存在を、その根底から決して意のままにすることはできないことをいう。このないは被投性の実存論的な意味に属している。（SuZ S.284）

この「意のままにすることはできない（nie mächtig sein）」が決定的に重要である。現存在は根拠存在であるが、しかし自己の存在を自ら作り出すことはできない。伝統的な形而上学の言葉を使うのであれば、現存在は自己原因ではない。あくまで、根拠として存在する可能性を選択するか、そこから逃避するかの可能性の前に投げ出されており、その意味では徹底的に無力である。現存在は、常に遅れを取ってい

る存在であり、投げられたところを選び取る（来たらしめる）ことしかできない。この根拠をあえて選択することで、この根拠から、そして根拠として存在するのである。

この根拠存在は、不安のうちで開示される最もおのれに固有な存在のことである。なぜなら良心の呼び声とは、不安の呼び声に他ならないからである（SuZ.S.277）。現存在が何に対して負い目を持っているのかというと、おのれに固有な存在を忘却しており、自身が本来的には不安であることを見失っているということである。呼び声は、この不安の中にいる現存在が、おのれ自身を取り戻すよう促す呼び声である。現存在が根拠存在であるというのは、自分で自分のことを決められるという意味の自発性ではない。現存在が根拠であるのは、現存在が存在者を存在者としてあらしめるところのものであるということ、現存在が超越しているということである。そのため現存在は、いかなる存在者をも自己の存在の根拠とすることが本来的な意味ではできず、自己の存在の根拠として存在するしかない。良心の呼び声は、不安であることを開示する呼び声であった。

『存在と時間』で語られる無は、極めて広範囲かつ多様に語られるものであった。しかしこれら多様に語られる無・無性は、死の可能性を媒介にして、それぞれ結びつくものであった。死の可能性は、現存在が存在者だけではなく、世界・世界の世界性に開かれたあり方をしていること、無に開かれたあり方をしていることを、現存在に開示する可能性である。負い目ある存在に属する無性も、このような無に開かれており、そのため自分で自分の根拠であらざるを得ないあり方を特徴づけるものであった。すでに『形而上学とはなにか』の無を理解するための土台はこの時点で示されている。次節で、『形而上学とはなにか』を検討することにしよう。

第２節　『形而上学とは何か』における無と現存在の超越について

『存在と時間』における無・無性を確認してきた。我々は無を主題としたテキスト『形而上学とは何か』を検討したい。序論で触れたように、『形而上学とは何か』の無は「存在者の存在の開示」を可能とするものであり、存在者の存在に本質的に属するものとして考えられていた。『存在と時間』では、存在者の存在に属する無（存在者の側から見られた存在としての無）について触れられてはいたが、十分に

議論が展開されているとは言い難い。あくまで存在者の存在に属する無は、『形而上学とは何か』で主題的に考察されるのである。

『存在と時間』では、無と無性の中心に据えられていたのは死の可能性であった。死への先駆が、世界の無および存在者の存在の無の開示を可能とすると考えられていた。我々は『形而上学とは何か』を検討することを通じて、無がいかにして存在者の存在を開示するのか、またそのような無へと投げ込まれて保たれている現存在は、いかなる存在者として考えられているのかを、より詳細に解明するようにしたい。この作業を通じて、なぜ存在者の存在の開示に無が関わるのか、無と存在と現存在はどのように関わるのかについて考察したい。

> 存在それ自身が、その本質において有限的にあり、それ自身を、無の中に投げ込まれて保たれている現存在の超越のうちでのみ、開示するからである。（GA9.S.120）

存在それ自身が、あくまで有限な我々現存在のうちでのみ開示されるのであり、その限りで存在も有限である（条件付けられている）。ここで言われている無とは何なのだろうか。『存在と時間』で無は、存在者ではないもの、世界であると考えられていた。『形而上学とは何か』でもそれは変わらない。存在者ではないもの、存在者から見られた存在が無のことである。

なぜ存在の開示が、有限な現存在を必要とするのか。この条件として考えられる無とはいかなる事態として考えられるべきか。我々はハイデガーの無に関する記述を検討し、なぜ無が存在を開示する条件として考えられているのか、そこで言われる無とはなにかについて考察したい。

無とは何かを我々が考えるとき、何も存在しないことを考えるであろう。しかしもしなにもないのであれば、そこにはなにもないが、存在するとも考えられないであろうか。それでは、無は存在しないものであるから、そもそも考えることさえできないのであろうか。ハイデガーも、無が論理学によって捉えられない点を指摘している（GA9.S.107）。

ハイデガーは一度「無は、存在者の全ての完全なる否定である（vollständige Verneinung der Allheit des Seienden）」（GA9.S.109）と考える。この「否定作用」がそ

もそも何であるのかが問題となる。否定は何かを否定することである。否定が可能であるのも、否定される存在者が先立って与えられていることを前提とする。このように考えると、「存在者の全ての完全なる否定である」にはそれに先立つものが存在することとなり、まったくなにもないという意味の無は到達不可能であり、そもそも考えることさえできないもののように思える。

無を考えることの困難さは、１）無が論理学によっては把握できない、２）無がそもそも何を指しているのかさえ把握できない、ことによるであろう。無が、否定作用やではないといった、様々な意味を孕んだものでもあるため、無の輪郭さえ掴むことが難しい。ハイデガーの戦略は、「無は、存在者の全ての完全なる否定である」という規定を踏まえた上で、この意味の無に先立って与えられている全体における存在者がどのようにしてそもそも我々に接近可能か、開示可能かを問うというものである。

「全体における存在者（Das Seiende im Ganzen）」とは、形而上学における神学の対象であった。「全体において(im Ganzen)」という言葉からもわかるように、そこには統一性が働いており、すべての存在者を包括するようなものが考えられている。しかし全体における存在者は、無と同様に対象化不可能であるため、それを考えることなどできるのだろうか。できたとしても、それはカントが考えたように理念の対象としてしか考えることができず、現象学の扱える範囲には入らないのではないか。ある意味では、我々は全体における存在者の「只中（inmitten）」に存在するものであるため、常にすでにその中へと投げ込まれているという仕方で、それと出会っている。この、出会っているとは何かを考えることが重要である。全体における存在者が我々の根底において絶えず生起しているものである。しかし我々を包み込むものであり、絶えず生起しているものであるがゆえに、それを把握することは本質的に困難である。

ハイデガーが注目するのが、「不安（Angst）」である。ハイデガーの考える不安とは、なんとなく不気味になる気分のことを指す。「不気味（unheimlich）」とは、世界と自己をつなぐ「親しみ（vertraut）」がなくなってしまう事態のことである。我々が世界に親しんでいるからこそ、内世界的なものに振る舞うことが可能である。この親しみが失われるのであれば、いかなる存在者も、また自分自身も無関心なものとなり、そこから親しみが失われることとなる。

> 存在するものが全体として退けさること、このことが不安のうちで我々に押し迫るのであるが、このことが我々を圧迫するのである。いかなる支えもない。ただこの「ない（kein）」だけが、存在者が剥がれ落ちていく中で、とどまり、我々を超えて来るのである。（GA9.S.112）

我々をすっぽりと包み込み、その意味で我々を支えてくれた全体との関係性が、何かしらの仕方で失われる（不気味になる）さいに、それにも関わらずこの全体が全体として、ただ存在することに直面する事態を意味する。存在者が存在することそのものが、いかなる支え（根拠）もなしに押し迫る事態を、ハイデガーは無と呼ぶ。無とは、この存在者が根拠なく存在することそのものが、まさしく圧迫してくる事態を指すのである。

現存在は支えを失う中で、振動することとなる。

> 現存在がそのうちでいかなる支えをもたないような振動を、徹底的に揺らすことのうちで、ただ純粋な現-存在だけが、なお現にあるのである。（GA9.S.112）

現存在は、全体における存在者から剥がれ落ちるという意味では、全体の外部にいると同時に、あくまで有限な存在者であり、そのため全体における存在者の只中にいるという意味では、全体の内部にいる。この全体の内部と外部を、現存在は振動しているのである。この振動は、存在者としての現存在の振る舞いではない。あくまで存在者である限りの現存在は、全体における存在者と一緒になって剥がれ落ちていくこととなる。そこでもなお残るのは、現–存在である。全体における存在者が剥がれ落ちていくのにも関わらず、それがまさしくそこから剥がれ落ちていくところ、距離化（差異化）が生じている現場である限りの現（Da）が残るのである。

この剥がれ落ちるというのは、二重の意味で考えられるべきである。全体における存在者が、現–存在から剥がれ落ちていくと同時に、現–存在が全体における存在者から剥がれ落ちていくという、距離化の働きがここでは生じている。この距離化が生じる現場を、現と理解することができるであろう。

ハイデガーは以下のように問いを立てる。「すなわち、無は不安のうちで、全体として有るものと一において出会われると。この「と一において」はなにを言わんとしているのか」（GA9.S.113）。「全体における」は、我々現存在も含めて、すべての存在者を包括しつつ、それに統一性を与えるようなものであった。我々は不安の中で、世界との親しみを失うこととなる。この不気味さ、全体における存在者とのズレが生じさせる、全体における存在者の圧迫感が無であった。そう考えるのであれば、この意味の無こそが全体における存在者を、現–存在に対して開示するものであると言えよう。これらの距離化の運動の中で、無は全体における存在者「と一において」開示されるのである。ハイデガーは、以下のように語る。

> 無は、それ自身の方へと向けるのではなく、本質的に拒絶するものである。しかし、この自身から拒絶することは、そのようなこととして、沈みゆく全体における存在者を、剥がれ落ちさせながら、指し示すことである。この全体において拒絶することで、全体における存在者を指し示すことは、不安の中で無が現存在に押し迫ることであるのだが、このことは無の本質であり、無化である。（GA9.S.114）

無が「拒絶（Abweisung）」するというのは、全体における存在者が「退くこと(wegrücken)」を、視点を変えて言い換えたものに過ぎない。無がそれ自身から排斥することは、全体における存在者から親しみが失われることであり、それは同時に全体における存在者が不気味なものとして、浮き彫りになる事態である。比喩になるのだが、あまりにも身近にあるものは普段はその存在に気づくことなく、それに支えられていることにも気づかないままである。しかし、何かの拍子にそれが壊れてしまい、うまくいかなくなったとき、はじめてそれの存在が浮き彫りになる。欠如を通じてこそ、それの存在が押し迫るということは、我々にも経験があるであろう。無が排斥的であり、かつ付託的であるというのも同様の事態である。全体における存在者への違和感が、同時に存在者が存在することを示すのである。ここでは無の本質として考えられているのである。無は、あくまで全体が全体として開示されるための、全体の中で生じる不和として理解されるべきである。

> 無化することは、いかなる任意の出来事ではなく、むしろ拒絶することで、剥がれ行く全体における存在者を指し示すこととして、この存在者を、無に対して端的に異なるもの（Andere）として、今まで隠されていたその全き異様さ（Befremdlichkeit）のうちで、顕とするのである。（GA9.S.114）

この無化において、全体における存在者は異様なものとして、また無と端的に異なるもの、すなわち存在するものとして露となる。

> 不安の無の明るい夜のうちで、初めて存在者がある一つのそのようなものとして、根源的に開示性されることが、すなわち存在者が存在するのであり、そして無ではない、ということが立ち上る。しかしこの語りの中で、我々が付け加えた「そして無ではない」ということは、後付の説明ではなく、むしろ存在者一般の開示性を、前もって可能とするものである。根源的な無化することの無の本質は、この無が現–存在を初めて、ある一つのあるがままの存在者の前にもたらすこと、その内にある。（GA9.S.114）

無は存在者としての存在者の開示を可能とする。存在者としての存在者と全体における存在者は、どのような関係性であろうか。存在者としての存在者とは、存在者を存在者として規定するところのもの、すなわち存在者の存在のことである。しかしこの存在者の存在は、存在者なしで存在するものではなく、あくまで存在者に属するものとして考えられなければならない。そのため、存在者の存在を全体における存在者と別に実体としてあるものとして考えてはならない。全体における存在者のあり方（存在）が、存在者の存在である。より正確に言うのであれば、全てを包括する全体における存在者が、他ならぬそのようなあり方をしているということが、存在者の存在である。無は、存在者がそれ自体としてどのように存在するのか、その存在を開示するのである。

しかしこのような無と死の可能性はどのように関係するのだろうか。不安はあくまで死の可能性に直面することへの不安である。この不安が、世界および存在者の存在を不気味なものとして、現–存在に開示するのである。死の可能性が、いわば垂直的に到来することを通じて、直下の現実である存在者が存在する（世界が世界

する）ことが露となること、これは同時にリニア的な時間からの離脱を意味するのだが、これが無の無化のことである。足元が崩れ落ちる経験であると同時に、他ならぬ私が、存在者が根拠なく存在することに対峙する経験こそが、不安で考えられているものである。これは、このような出来事が生じる現–存在が、深淵であることを経験することでも有る。

死の可能性が、このような経験を可能とするのも、死の可能性が遠さ（現実からの離脱）を可能とするからである。遠さ（死の可能性への先駆）が、近さ（存在者が存在すること）へと到来することを可能とするのであり、この振幅こそが現存在の基本的なあり方にほかならない。死の可能性は、世界に埋没していた現存在を振動させるものであり、自らが振動する存在者であることを自覚させるものでもある。このように考えるのであれば、死の可能性が存在者を存在者として開示する無でもあることの必然性が理解できるだろう。死への先駆はいわば、存在者が存在者として、世界が世界として生起するところである現–存在を、そのようなものとして開示するものである。この現–存在は、それ自体はいかなる存在者によっても根拠付けられることのない深淵であり、『存在と時間』の根拠存在とは、この意味の現–存在として存在する可能性の前に立たされている、本質的に不気味なあり方を意味しているのである。

結論

ハイデガーは無で何を考えていたのか。また無と存在と現存在はどのように関係するのかそのような問にも、我々はある程度答えられる位置にいる。ハイデガーの考える無の無化とは、死への先駆を通じて、現存在が全体における存在者から剥がれ落ちること、これは同時に無が全体における存在者と一になって圧迫することであるが、全体における存在者から遠ざかりつつ、そこへと向けて到来することであった。死への先駆を通じて、存在が無意義性を帯びて、現–存在に対して開示されることが、無の無化することである。存在者の存在は、現–存在に対して不気味であり、かつ異様なものとして開示される。無はいうなれば存在者の存在が、現存在に対して開示されるさいの、その異様さ不気味さのことを意味しており、アスペクトの違いしかない。1949 年『根拠の本質について』第三版の前書きにおいて、『形

而上学とは何か』の無について言及されている。「無とは、存在者ではない、そのため存在者の側から経験された存在のことである」（GA9.S.123）といわれるのも、このような意味である。

無と存在と現存在の関係性は、上記のようなものとして理解できる。現存在は、存在者が存在することが開示される場としての性格を持ち、無は存在者の存在の開示されるさいのアスペクトのことである。このような現存在理解は、それ以後において更に発展させられている。１９３５年夏学期講義『形而上学入門』では、人間存在の本質が不気味なものであると言われる。現存在とは、存在者が存在することそれ自体が、他ならぬ存在者の只中で開示される出来事であり、それまで親しまれてきた存在了解が新たに作り変えられるような、異様な出来事として考えられるようになる。このような理解は、すでに『形而上学とは何か』の無の内に示されているが、ハイデガーの関心はさらに存在者の存在が人間によって新たに語り直され、その意味で存在者の存在が創設されるその現場を探求することに移る。この次元は、後期ハイデガーにおける存在の真理や、存在の歴史の問題と密接に関係するものである。本論文の考察は、『存在と時間』と後期の哲学をつなげるための、ある着手点を形成するものであるといえよう。

文献（ハイデガーを除き、著者姓のアルファベット順に並べる）

SuZ: Martin Heidegger. Sein und Zeit. 19. Auflage. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2006.

GA: Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann.

--- Bd.9: Wegmarken. Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 2004.

『形而上学とは何か』の訳は、ハイデガー全集(辻村公一ほか編、創文社)を参照した。

『存在と時間』の訳出の際、ちくま学芸文庫、細谷貞雄の訳を参照した。

マルティン・ハイデガー他　『ハイデッガー　カッセル講演』　後藤嘉也訳　平凡社ライブラリー、2006 年。